

經濟論叢

第七十五卷 第四號

經濟學をいかに學ぶか

- 現代の經濟學と古典……………青山秀夫……(2)
- 經濟學の歴史的研究の意義……………出口勇藏……(9)
- 經濟法則の認識について……………吉村達次……(25)
- 會計學的觀點と會計學的思考……………酒井文雄……(35)
- 一八三〇年イギリス下院の階級構成……………佐藤明……(55)
- ドイツ帝國主義と「結集政策」……………大野英二……(74)
- ドイツ共和民主國における經濟發展……………金鍾碩……(93)
- 公有林野統一に現れた絶對主義的經濟政策の特質
……………鶴嶋雪嶺……(114)
- ロック・ウッド著 日本經濟の發展(1868—1938)
……………堀江保藏……(130)

[昭和三十年四月]

京都大學經濟學會

經濟學の歴史的研究の意義

出口 勇 藏

目 次

- 一、經濟學が社會科學の一部であることがどうしてわかつてきたか。
- 二、經濟學の歴史的研究の意義。

一 經濟學が社會科學の一部であることがどうしてわかつてきたか

經濟學が社會科學の一分科であると考えられはじめたのは、わが國では古いことではない。西歐の經濟思想が輸入されるまではこんなことが考えられもしなかつたのはいうまでもないが、その輸入がおこなわれるようになってからも、直ぐにというわけではなかつた。そしてそれにはつぎのような理由があつたのである。經濟學が社會科學の一分科として考えられるためには、「經濟生活が社會生活の一部である」ということがある程度に強く一般的に考え方となつていなくてはならない、というのが、その理由である。こういえば、きわめて當然な自明のことがらであるようにみえもしようが、實は、「經濟生活が社會生活の一部である」ということがわかつてくるためには、社會そのもののある進み具合と、そこで生きるひとびとのある氣がまえとが前提されてゐるのであつて、すぐに了

解されることであるとは思えない。そこで、この前提について、簡単に説明する必要があるだろう。

まずはじめに、近世の市民社會が自立して、ある程度に發展していることが、前提せられる。自立してというのは、社會史について學ばれるように、市民社會が、固有の意味で、近世よりも前の社會には必ず見られる各種の共同社會から生じるいろいろな制約から自由になり——消極的な規定——、その存立と運営とのために、固有のあたらしい原動力と原理的な機構とをもつている——積極的な規定——ということである。近世の市民社會の成立のためには、傳統的な共同社會の崩壊が歴史的に必要な要素であつたことはいうまでもないが、さらに、近世の絶對主義體制について知られるように、共同社會の崩壊のあとを共同社會の擴大再生産によつて收拾しようとする、本質的に反近代的な原理によつて秩序づけられた強大な權力組織の發展もまた、市民社會の成立のためには、その鬭争の相手方として、克服すべき對立者として、必要であつた。共同社會の制約からの解放が市民社會の成立のための消極的な條件であるというならば、克服すべき對立者としての絶對主義體制の出現は、その成立を準備するための積極的な條件であつたのである。どういう意味で、絶對主義體制が積極的な條件となつたのかといへば、市民社會の本質的な構成原理が、この權力組織の力の行使によつて、客觀的にも主體的にも、明らかになつてきたからである。この間の事情は、しかし、少し複雑であるから、説明のためある程度の言葉をついやすことが必要である。具體的な敘述をさけて、抽象的なかたちでいへば、それはつぎのようになるだろう。——共同社會の崩壊によつて、共同社會に特有な社會的きずなが斷ち切られると、そのあとには、身分關係の中に眠つていた個人的な生活主體と有機的な統一の下にあつた社會生活の種々相とが、一方は生活主體として他方は客觀的な生活環境として、第一次的な解放ないし分裂を経験することになつた。生活の解放ないし分裂というのは、身分關係の、上級から下級にい

たる階層的な意志の傳達・強制にもとづいていた一方的な社會關係がその統率力をうしなない、これまで受動的にだけ行動していた主體の前に、能動的な行動の可能性が開かれ、自由と責任をめぐりぬの決意と負擔においてもちうるようになることである。生活のあり方の解放ないし分化ということも、これに準じて了解される通り、人格と人格との關係と人間と物との關係がこれまでの有機的な統一を破られて別個の二つの生活の關係となり、だからたとえば、親子のえにしというような道德生活と生活資料獲得のための經濟生活とが、はなして考えられることになつてきた。のみならず、たとえば法生活や經濟生活などは、それぞれ獨特の原理をもつた別個の生活なのだということも、生活の實態からみて、考えられるようになってきたのである。社會生活の種々相のいわゆる相對的な獨立ということがいえるようになってきた。そしてすべて解放ということについていえる通り、生活の前途は、解放された主體に即して考えるかぎりは、解放感にあふれ希望にみちた明るいものとなつた。ところが、社會全體としてみるかぎり、この第一次的な解放の時代は、秩序の喪失であり統一の破壊であつて、社會生活の全體を積極的に新しい段階においてまとめて實現することはできなかつた。解放された社會全體の構成原理がまだ積極的に出現してはなかつたからである。したがつて、この段階において社會の統一的な形成をはかろうと思えば、それ自身は舊い原理をば不自然な形にまで擴大して、ヨリ強力に推進するのほかはなかつたわけである。これがつまり絶對主義體制の構成原理である。この體制は、その原理自身は舊い原理なのであるから、第一次的な解放を経験した生活主體と生活の種々相とがこれとするとよく對立せざるをえないことは、明らかである。だから、この體制が強力になるにしたがつて、解放感にあふれた主體にとつては、この體制そのものが大きなくびきと感ぜられないわけにはいかなかつたし、また相對的に獨立の領域と考えられはじめた生活の各分野に、大きな制約が、したがつて脅威が、加えら

れるように思われたのは、當然であつたといふべきである。ひとたび獲得された主體の解放感と生活の自律感とは、否定されようとする脅威を前にして、維持・發展をはからなければならず、自分自身の本質を見きわめようとする熱烈な意慾にもえなければならなかつた。そしてここに近世人の自覺と近世の分化した社會生活に對する客觀的な省察とが促進された理由があるのである。ひとびとはこの自覺とこの客觀的な省察とを武器として、絶對主義體制との鬭争にしたがつた。これが近世の個人意識の確立と社會生活の各分野についての、固有の原理から構成された独自の體系的把握の成立との根據である。個人の意識の確立はいわゆる「自我」や「自覺」の成立を意味するし、社會生活の各分野の體系的把握の成立とはすなわち、社會諸科學の成立のことである。

個人の「自覺」と近世の科學の成立の間に密接な關係があることは周知の事實であるから、これについてここに多く語る必要はない。しかし問題を社會科學にかぎつて考えるばあいには、更に考えをふかめるべき問題がある。それは、社會科學のばあいには、個人の「自覺」が階級的な自覺と結びついているという事情があるからである。數學や物理學のばあいには、また藝術その他の精神文化のばあいには、たとえ絶對主義體制の保護を受けた孤立した個人であつても、理論や藝術作品の創造についていうかぎり、新しい文化をうむことは可能であつた。けれども、社會科學のばあいには、絶對主義體制との大びらな、ないしひめやかな、鬭争をばまじえることなしには、絶對に成立することができなかつたのである。(たとえば、ホッブスの政治理論は絶對主義體制のための理論であると思われがちではあるが、世襲の君主の統治する絶對王制とは矛盾する一面をもつており、それがかれの理論をば近代的な政治理論たらしめてゐる。)そのばあい、個人は孤立してはいないで、階級人として擴大された形で社會に存立しつゝ、絶對的な權力と對抗關係に立つてゐる。個人としては權力に對しては弱いけれども、階級人に擴大す

るときには、權力に對抗することができたわけである。このように、近世における「自我」の「自覚」ということも、社會生活に關して問題となるかぎり、眞實には、絶對主義體制と鬭争する階級人の「自覚」——階級意識——としてはじめて生じたということを、はつきりと見定めておくことが必要である。

こう考えてくると、「個人」の「自覚」と社會諸科學の成立との間には獨特の密接な關係があることが、了解されてくるであろう。まず、法律や經濟や道徳にはそれぞれ、相對的にてはあがあるが、独自の原理がひそんでいて、その原理に忠實にしたがうときには、市民社會以外の力の保護や指導をまつまでもなく、自律的にその生活はいとままれてゆくという、當時の自然法的（あるいは自然主義的）な思想と、人間の行動は個人の自由な知的判断にもとづいて決定されることがもつとも合理的であるという思想とは、直接に結びついたのである。だから、個人について眞實である原理はやがて人間一般に、したがつて人類について眞實である原理であり、その原理にもとづくばあいに、市民社會は合理的に構成されるし、合理的に認識される、したがつてまたその組織體を社會批判の基準としてもちいえることもできる、という主張がなり立つたのである。しかしそのばあい、直ぐ上に注意したように、個人と人間一般したがつて人類との間に、また個人生活と社會生活との間に、階級人が入りこんでいて、上の二つのものをつないでいた。つまり、この主張をとなえた個人というのはブルジョアとしての階級意識をもつた、ないしはもちえた個人であつたのであり、かれらがめいめいのブルジョア的な主體性にしたがつて行動するとき、社會生活の各分野はそれぞれの原理に應じて合理的に形成せられ、また社會生活の科學的認識も、ブルジョアを人間のモデルと考え、ブルジョアの行動原理から推理をすすめるときに、ただしく成り立つ、とされたのである。

このように、共同社會や絶對主義體制に反抗してブルジョア的な個人とそのイニシアティブによつてつくられ

る市民社會を肯定し、その實現をはかろうとする意志が、經濟生活をば社會生活の一部として考ふるばあいには、根ぶかく存在する。このことは市民社會の成立期、ことに先進的な民族國家における市民社會の成立期に、とくにはつきりしていたのである。

經濟生活が社會の一部であり、經濟學が社會科學の一部であるということが考えられるためには、しかし、これだけでは十分とはいえなかつた。市民社會を肯定する意志のほかに、市民社會を否定する意志が、それと矛盾しながら働くということが必要であつたことを、歴史のつらぬく社會科學の論理はしめしている。

それは、さきの市民社會にたいして肯定的にふるまうブルジョアの個人のイニシアティブによつて、新しい形で社會の統一がもたらされうるかどうかということが、疑われはじめ、ついで否定されるようになり、そこで、ブルジョアの個人による市民社會の積極的な建設ということが不可能であることの證明が、社會科學者の任務とされるにいたつたからである。眞の市民社會の建設は、ブルジョアの個人によるいわゆる市民社會の下ではその生活を脅やかされざるをえないところのプロレタリアートが、いわゆる市民社會をば否定することによつてのみ、なしとげられるのであつて、その實踐のための武器となるべきものこそ眞の社會科學であり、そこでこそ經濟生活と社會生活との關係が正しくとらえられた正しく實現されるのだ、と考えられた。社會生活を正しくいとなみ、經濟生活と社會生活との關係のあり方を正しく實現すること、社會科學や經濟學を正しく認識して、その間の關係を正しくとらえられることは、密接に結びついているが、これはいづれもブルジョアの個人にはできる相談ではなく、プロレタリアートとしてのみ可能である、という認識が、生まれたのである。そしてこのことによつて、社會科學は一段と高い水準に到達し、經濟生活の社會生活の内に占める地位は、明確の度を加えるにいたつた。

要するに、經濟生活の社會生活の中に占める位置は、したがつてまた、經濟學の社會科學の中で占める地位は、近世の市民社會を肯定する意志とこれを否定する意志とによつて市民社會が實踐的にためされ、またその二つの意志に裏づけられた知性によつて市民社會が認識されることによつて、明らかになるにいたつたのである。

二 經濟學の歴史的研究の意義

社會科學の一部門としての經濟學と社會諸科學の全體との關係について上にきわめて抽象的に、その歴史的な推移を中心として語つたのは、そのこと自體のためではない。そのためには、もつと具體的な敘述が必要であることは、いうまでもない。上の敘述は、これからの敘述の前置きとしてかかれたのである。どんな意味での前置きかといへば、二つのことにかかわつてゐる。まず、經濟學が社會諸科學の全體に組み入れられてのみ、つねに具體的に學ばれ、研究され、社會の期待にそうことのできるものであることに、注意をうながそうとしたためである。第二に、經濟學がその本質上歴史的なものであるから、經濟學の歴史的研究が本質的に重要であるということに、注意をうながしたためである。そして、ここでは、特にその第二の點について、少し詳しく語り、第一の點については、第二の點を理解するに必要である程度にとどめておこうと思う。

社會科學は、歴史的に生成した近世の市民社會における社會生活の諸相——政治・道德・法律・經濟・教育その他——について、それぞれひとつづつ成立した。そしてそのそれぞれは、さきにのべたように、市民社會に對する肯定と否定との二つの意志とそれにうらづけられた知性によつて、ためされ、認識されてきたのである。だから、社會諸科學が相互に密接に關連し合つてゐることは、全く當然のことだといわねばならない。そのばあい、社會科

學の研究の對象すなわち社會生活は、まず自然と對照的に考えられて、「政治體」Body politicなどと規定され、それについて、あるいは政治、あるいは法律、あるいは經濟を中心として、省察を加えることによつて、社會科學の各分野が組織されたのである。それぞれの生活分野を中心に考察することは、太陽光線をプリズムにかけてスペクトルをつくり、そこにあらわれた七色の色あいのそれぞれを中心に太陽光線を研究することに、たとえられる。

雲間をやぶつてかがやく太陽光線は市民社會、プリズムは人間の知性、プリズムをかざす手は人間の意志であるといえよう。連続スペクトルにあらわれた七つの色あいが、はじめには、それぞれ單光色と考えられたように、社會生活の各分野がそれ以上には分解できぬ單位からなると考えられると、それぞれの分野がみなひとつの科學の對象となつた。單光色には獨自の波長と獨自のガラスに對する屈折率とがあるように、社會生活の各分野には獨自の原理と構造とがあることが、その後の研究の發展にもなつて明らかになつた。たとえば道德と經濟とは、生活の場としても、一方は道德的な價值の本質の探求とその眞諦の社會への實現およびそれにそむくもの社會からの追放を目ざしておこなわれる社會生活の部分、他方は生活資料の生産と消費とかわる社會關係の究明とその合理化とのための部分であつて、二つのものはそれぞれ固有の原理から成り立つているのみでなく、さらに、それぞれにかわる人間主體のあり方や行動の仕方にも、獨特のものが——道德的人格とか「經濟人」とか——あることが知られるようになった。同じ市民社會の社會生活でありながら、別々の觀點からながめられることによつて、別々の生活が多く存在するような趣きがあり、同じ市民でありながら、生活の諸相につれて異なつたマスクをかぶつて登場する多くの人間に分裂して生活しているかのよう思われた。生活も生活主體も多方面にわかれること——いわゆる分業——によつて生活が豊富になり、生活分野が充實し、人間の發展もそこから期待されると思われたので、科

學についても、分化した社會生活の各分野について、独自の原理の探究とそれからの生活の構成をはかることがさしあつての任務であるとされた。そのばあい、社會諸科學のうちで、最初に含蓄的な形で形成されたのが政治學であり、そこから神學や法律學や道徳學や教育學が分化しはじめ、經濟學が同じく獨立して特有な原理によつて體系をそなえた科學として構成されたのは、いちばんあとからであつた、という注目すべき事實があつた。經濟學の史的發展について學ぶものが最初に感銘をうけ、またいつになつてもその意義をかん味するように、アダム・スミスの學問の體系は、この事實を物語つてゐる。

このばあい、ひとつの重大な問題が生じるはずである。それは、社會生活を分化させて、社會諸科學が成立するとしても、もとの社會生活の全體はどうして學問的に認識できるのか、という問題である。社會生活は具體的には種々の生活分野が重なり合い連關しながら入り交つておこなわれる以上、社會生活を全體として學問的に認識できるといふことが、どうしても必要となつてくるからである。この疑問にたいして、これまでの社會科學は、つづめていふと、二通りの解答を用意してきたと思われる。ひとつの解答は、社會諸科學をひとつの體系のものに組織して、その組織體によつて社會生活の全體についての疑問にこたえようとする道であつたし、いまひとつの解答は、社會學という社會科學とならび且つそれらの相互の連關をつかさどる、ひとつの科學が存在して、それがその疑問にこたえようと考ふる道であつた。

社會學の學問的性格が歴史的にどのようなものとして生まれ、どんな推移をたどつてきたかを明らかにすることは、ここでの問題ではない。けれどもここであつておきたいことは、どんな裝備と展望とを社會學に與えるにしても、社會諸科學とは獨立の原理と構造とをもつた科學としての社會學というべきものは存在する餘地は絶對になく、

そういう内容が盛りられるべくして提出された多くの意見は、實際のところは、社會諸科學の雜すいであるか、生活の具體的な内容から遊離した形式的な同一と差異とに着目して構成された貧しい一連の命題につきるか、それとも權力——社會科學の成立の最初に取上げられながらも科學的分析のもつと透徹しにくい事態——に關する理論かのいづれかにすぎなかつた。だからもし社會學が科學的な純粹さを失わずに追究されてゆけば、それは當然に、ひとつあるいは二つ以上の社會科學として、自ら解消する運命をもたざるをえないものなのであり、社會學はそれにたいしてかかげられる科學的要請にはこたえることができぬものであることが、わかるはずである。

のこる道は社會諸科學の體系化によつて社會生活の全般にたいする學問的要請にこたえる仕方であるが、それにも二つの區別すべきものがある。その一つは、なにか一つの社會科學を中心に平面的に社會生活の各分野の連關をばしめし出さうとする方法であつて、たとえば道德を中心に社會生活の全般を了解しようとする立場（たとえば、シャフツペリーやカント）や、法を中心に社會生活の烏ガ、圖をえがこうとする立場（たとえばベンサム）や、經濟を中心に社會生活の構造を概觀しようとする立場（俗流ブルジョア經濟學や俗流化したマルクシズムの立場）などがある。これらの立場は、社會生活の内容の連關が同じ平面で一義的かつ決定的にせめられるという特徴をもつてゐる。たとえば、經濟を中心に社會生活を構成する立場では、經濟と法律、經濟と政治、經濟と道德、その他、經濟と文化の諸相との連關が、ある程度まで明瞭に一方的な規定という仕方ではせめられていて、社會生活の全體が秩序だつてゐるかのように見える。しかしながらよくみれば、そこでは法律と政治や道德およびその他の文化の間の相互の關係は決して明らかではなく、また經濟と他のものとの關係も單に一方的に規定されて、反作用のもつ影響は全然無視されてゐる。だから、社會生活が全體としていきいきと動いてくる實相は、この立場からはとらえら

れるべくもないのである。

さて、いまひとつの道は、社會諸科學を平面的にはなく立體的に體系づけようとするものである。立體的な體系は、奥行きがあるという點で、平面的な體系と本質的にことなつてゐる。體系に奥行きがあるというのは、それぞれの科學があるいは表面に、あるいは背面に位置して、その間に重層的な關係がみられるということである。しかしこの重層的な位置づけによつて生まれる體系の奥行きは、特殊科學の亂雑なつみ重さねによつて生じるのではなく、その奥行きには原理による秩序があることは勿論である。そして、こういう體系づけ方の例は、アダム・スミスとマルクスの體系についてみることができるものである。まずアダム・スミスの體系について簡単にみておこう。かれの體系が當時のいわゆる道徳哲學を構成してゐた科學の部分——經濟學・法律學・倫理學・および神學——を批判的に検討することによつて生まれたものであることは、周知のとおりであるが、傳統的に倫理學を中心に體系づけられていつたその哲學をば、スミスは經濟學を中心にすえ、その上に法律學と倫理學とを重層的に重ね、神學を、その體系から、結局には、除外することによつて、體系的に再構成したのであつた。そのばあい、經濟・法律・政治・倫理・教育などは社會においてそれぞれある位置をしめてゐるが、經濟を中心とする一方的な關係づけによつて、平面的に並列してゐるのではない。自律的に運動する産業資本によつて指導された交換經濟を基礎地盤として、その上にそれにふさわしい國家權力が形成され、その權力によつて交換經濟の運動を妨げることのない法律が制定され、またその手によつて、軍備や教育や公共事業やおこなわれる社會の機構が、重層的な構造において、築き上げられており、資本主義社會にとつてふさわしくない法律や政治や倫理や教育は、その社會の發展をさまたげるものとして、烈しく攻撃されてゐる。この資本主義社會の實踐的な體系を體系つけてゐるものは何かと

いへば、それは歴史的な人間像——「勞働する貧民」とスミスが呼んだ歴史的な階級的な人間をば一般化してえられた人間像——であつた。この人間像と經濟・法律・政治・倫理・教育が結びつき、經濟生活を基底にしてそれらが相互に連關し合つてゐるのである。この體系の詳細な展開は、しかし、スミス自身において、完成したとはいえない。その體系の原理となつた人間像は、たしかに歴史的な近代市民の人間像であるかぎり、歴史的なものにはちがひなかつたけれども、人間が置かれてゐる生活環境と人間との間に展開される活きた連關の基本構造が、歴史的なすがたでとらえられ、それが體系の原理とはなつてゐなかつたからである。スミスのばあいには近代人の人間像は確立してゐたけれども、その人間がとり出されるべき近代的な社會全般の構成原理が、歴史をつらぬく社會の一般法則の上で、明らかにされるにいたつてゐなかつたのである。このことを天才的な仕方ではとげたのは、マルクスであつた。唯物史觀という歴史哲學は、前にいつた平面的な體系づけの原理に歪曲されやすいものであるが、マルクスにおいては、——いわゆる唯物史觀の公式をよくよめばわかるように——決して單純な經濟決定論ではなかつた。社會構造が重層的で、その各分野の間には、一方的な制約關係だけではなく、相互的な制約關係もまた存在することが承認せられ——いわゆる上部構造の下部構造への反作用というのはこれである——、それらの制約關係を社會について具體的に認識すべきことが要求されてゐる。ところが、究極的には經濟の規定力をもつとも重要視するけれども、社會生活の實際のすがたを知るためには、上記の反作用も見おとせないということの至當な意義をも正當に評價するという、この思想は、容易に身につけられるものではないのである。この思想の立體的、重層的な構造をとらええないで、それを平面的に淺薄に解する俗流マルクス主義のあやまりは、今まであまり多すぎたし、また將來といへども、跡をたつとはいひきれないであらう。

ともかく、スミスにしろ、マルクスにしろ、社會諸科學は立體的な構造をもつたものとして、體系づけられていた。そしてこれが社會科學を正しく體系づけるたゞひとつの道である。そしてこの道にそつて考へるといふことが、また經濟學という特殊な社會科學についても要求せられるべきであるだろう。この要求は、それでは、どうして満たせるのか。ここで主に考へようとするのは、實はこの問題なのである。

社會諸科學の體系が、上にのべた意味で奥行きをもち、立體的、重層的であるべきだというのは、社會生活そのものが立體的、重層的な構造をもち、奥行きがあるがためである。また社會に生活する人間もまたそれに應じた立體的、重層的な構造をもつた、奥行きのある存在であるがためである。そこで、社會生活を系統立つて知ろうと思ふならばどのような身がまえと心がまえが必要かといふことは、この根本的な事實の眞義に徹することによつてのみ、わかつてくるはずである。

社會科學やその體系が立體的で奥行きがあるといふのは、それを正しく認識するためには、それにふさわしい構造をもつた知性を用意するのにならぬといふことである。對象に奥行きがあるのだから、それを寫しとる知性のレンズの焦點が、あるときは近くあるときは遠くに、結ばれることができなければ、對象を正しくとらえることはできない。對象の奥行きに應じて、焦點を合わせられる知性といふのは、知性そのものに奥行きがあることとして焦點を自分で自由に合わせる能力を、そなへて、といふことである。つまり、社會科學においては、知性が奥ゆかしく、自由であることが、絶對的なひとつの條件となるのである。これに反して、さきに批判的にのべられた、平面的に對象を映しとる立場とは、知性のレンズの焦點が固定して動かないときのことであつて、焦點に合つた平面はたしかに鮮明であるが、それ以外の平面にある對象のすがたは、大なり小なりボヤけてこなくてはならな

いように、對象の占める位置によつて、認識の鮮明度に差が生じなければならぬのである。この立場の知性は、平面的で奥ゆかしさがなく、固定してしまつていて自由ではなくなつてゐるのである。

知性が奥ゆかしくて自由であるとは一體どういふことか。それはまず第一に、知性が生ま身から引きはなされてゐないで、生ま身に宿つてゐる知性である、ということである。生ま身に宿る知性であるから、それは生ま身が生きる社會環境からはなれたところに存在して、その問題から遊離した問題をば考えるような知性ではなく、環境の問題を生ま身の社會的實踐において解きつつ取り上げる知性である。また生ま身に裏づけられた知性であるから、それは知性のすべてを働きをば出しつくすところの知性であり、その働きを部分的に誇張したり無視したりするような抽象性から免れることができるものである。つまり、社會科學における知性は、第一に、實踐と結びついた知性である。第二に、奥ゆかしくて自由な知性とは、自分が立つており、實踐的に問題ととり組んでゐる歴史的環境位についてみずから知つてゐる知性である。自分自身にしろ、自分がとり組む問題にしろ、すべてが徹底的に歴史的なものであつて、歴史と無關係な一カケラの要素をもふくんでゐないといふことを知つてゐる知性である。階級的な社會、民族的な社會における自分の地位を歴史的なものとして自覺してゐる知性である。こういうえば、この知性は歴史的な限定を受けてゐる以上、奥ゆかしいどころか視野のせまいものであり、自由であるどころか不自由なのではないか、という反問があるだろう。たしかにある意味ではその通りである。しかしまさに歴史的な限定を受けており、歴史から遊離した一カケラの要素を身に帯びてゐないからこそ、實は奥ゆかしさを身につけ、自由な認識の主體となることができるのである。(知性が自分について知る——自覺する——努力を積まずに、そのまま奥ゆかしく自由であるというのではない。努力して自覺することによつて、そのものになり、うるといふのである。)

つまり、社會科學における知性は、第二には、歴史的であり、また歴史的であることを自覺している知性なのである。さきに、スミスとマルクスとを對比して語つたとき、スミスの體系を成り立たせていた基礎原理が近代的な人間像という歴史的な原理ではあつたが、それが歴史をつらぬく社會一般の法則の上で明らかにされてはいない、といつて批判し、このちのものがマルクスの體系の中では天才的な形で體系の基礎におかれていた、とのべた。がこれは、スミスのばあいには、社會科學の知性の第一の要件がみたされてはいたが、第二の要件が十分にみたされていなかったということ、ところが、マルクスにおいては、この二つの要件があわせてみたされて、ということにほかならないのである。

社會科學において歴史的研究といへば、普通には、理論的研究と政策的研究と並立する意味での、歴史的研究であり、その内容は、事實の歴史と思想の歴史とに分けられ、經濟學についていへば、經濟史と經濟思想史あるいは經濟學史とがその内容である、と考えられている。實際その通りである。けれども、ここに大きく注意をうながしたいと思うのは、經濟學の歴史的研究は、過去の經濟事實や經濟思想について、對象的に知つて、過去についての物知りになるためにおこなわれるのではなく、それよりも一そう、重要なことは、經濟學とは、その研究の主體についても、研究の對象についても、歴史性を基本的な屬性としてゐるものであるから、たんに歴史的研究のみといわず、理論的研究にしても政策的研究にしても、對象にたいする歴史性についての意識と主體の歴史性についての意識とを——この二つのものをあわせてわれわれは歴史意識と呼ぶ——そなえることなしには、正しく學びえないものだ、ということである。經濟學を學ぼうとするひとが、自分たちはいまだどのような動向をたどつてゐる世界に生きてゐるかということをつねに客觀的にたしかめるとともに、日本の社會全體のあり方とその中で自分たちの境

位をつねに主體的に自覺する努力をつまなければ、正しい意味での經濟學徒となることはできない。歴史的な研究をするばあいかぎらず、政策の研究や理論の研究にしようというばあいにも、この歴史意識が經濟學を學ぶための大切なしずえである。そして歴史意識をつちかうことは、究極的には歴史哲學を學ぶことによつてのみできることらである。このようにいえば、あるいは、經濟學の研究が——もつとも卑近な日常生活の事實についての科學の研究が——ひどくまわりくどくなつてしまつたと感じられるかも知れない。實際、經濟學にはたしかにまわりくどい研究が必要な一面がある。それがこの科學の進歩が比較のおそいひとつの理由であると考えられる。けれどもまた、經濟學は（そして一般に社會科學は）まつたく手近な心がまえをおしふかめてゆくことによつて學ばれるともいえるのである。それは、世界における社會の動きはいまどうなつてゐるか、そしてわれわれはその中でどこでどんな位置を占めてゐるか、ということ、常に知り省みることのほかにはない。そしてそれは誰にだつて出來ないことのないものである。